



Data
監督・脚本: ルーカス・ドン
出演: ビクトール・ポルスター/ア リエ・ワルトアルテ/オリヴ イエ・ポダール
.....
.....
.....
.....
.....
.....

■ショートコメント■

◆本作は男の身体に生まれつきながらバレリーナになりたいと願い、今は性転換手術を受けるタイミングを見計らいながらホルモン治療を続けている、15歳のトランスジェンダーの女の子ララ（ビクトール・ポルスター）を主人公とする物語。

第71回カンヌ国際映画祭で、ルーカス・ドン監督が新人監督賞に当たるカメラドール賞を受賞したことで一躍有名になった映画だが、私はこの手の映画にそもそも興味が無いし、あまり好きでもない。しかし、話題作だからということと、他の作品の上映時間の関係で鑑賞。しかし・・・。

◆私は、ミュージカル映画や音楽映画は大好きだし、バレエ映画も大好き。『ブラック・スワン』（10年）は最高に面白かった（『シネマ26』22頁）し、5月20日に観た『ホワイトクロウ/伝説のダンサー』（18年）も面白かった。しかし、本作ではバレエ学校にやっと入学できたララの練習風景が何度も登場するだけなので、何度もそればかり観ていると飽きてしまうだけ。本作は全然バレエ映画になっていないから、その点は期待しないように・・・。

◆15歳のララは性転換手術前で、今はホルモン治療を続けているだけだが、外見では完全に女の子。たしかに胸はまだ小さいし、背が高く、骨格にはまだ男っぽさが少し残っている。しかし、顔は完全な女の子だ。しかし、股間は・・・？私はその医学上のことにもあまり興味が無いが、ララとルーカス・ドン監督はご丁寧にもそれをスクリーン上で何度も映し出してくれる。したがって、なるほど、こんな苦労があるんだ、ということがよくわかるが、そんなことがわかったからといって何になるの？

本作で面白いのは、父親のマティアス（アリエ・ワルトアルテ）のララに対する理解がめっちゃ深いこと。ララがバレエ学校に入学するための住所移転についても、自分はタクシー運転手だから全然苦にならないし、弟は小さいから転校してもすぐに慣れると言ってくれている。また、ララの病院通いにもすべて付き添い、親身になって（父親だから当たり前？）一緒にドクターの話の聞いているからすごい。私なら「勝手にしろ！」と突き放してしまうところだが・・・。

したがって、本作ではララとマティアスが毎回病院で治療方針を確認していくストーリーが大きなポイントになるので、それに注目！

◆本作の舞台はベルギーの首都ブリュッセル。ルーカス・ドン監督が2009年にベルギーの新聞で読んだ記事が本作の原案になったらしい。

ベルギーもフランスと同じように“この手の問題”では日本よりはるかに進歩的なはずだが、ララの初日の学校では担当の先生はララに目を閉じさせ、クラスの女の子たちに「女子更衣室をララと一緒に使うことに抵抗を感じる人は手を挙げて」と問いかけていたが、さてその反応は？また、バレエ練習後のシャワーや水泳等での集団生活の中で、ララは必然的に女の子たちとの“裸の付き合い”を要求されることになるが、そこでのララの対応は？さらに、友人の誕生パーティでは「ララのおそこを見せて」という露骨なお願い（要求？）も出ていたが、それに対してララは・・・？

◆日本でも、例えばはるな愛は性転換手術をして成功した女性の1人だが、本作ではホルモン治療の成果がなかなか出ないことにララはイライラ。「ホルモン剤を増量して」と頼むララに対して、医師は「慎重にしなければダメ」と取り合わなかったから、ララのイライラはさらに増大していくことに。また、遅くしてはじめてララのバレエの技量はもともと大したことはなかったようで、早くからはじめていた生徒の倍以上の努力が必要だが、ホルモン治療が順調に進まず食欲も落ちる中でムリに練習をしているとかえってダメ。そして、そうなると、精神的にも肉体的にもララは次第に袋小路に追い詰められていくことに。

◆そして、ある日ついにララは“ある行為”を決行するが、それはいくら何でもムチャ。その行為はあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、それから数年後、バレリーナになることを諦めたらしいララが1人颯爽と歩いている姿を見ると、私は一安心。やっぱり“その手のこと”ではあまりムリしない方がいいのでは・・・。

2019（令和元）年7月12日記